

第二幕 唯一の神楽

長年の伝統を大切に紡いでいく

高林地区の木綿畑新田。そこには100年以上伝承されてきた市内唯一の神楽芸能がある。平安時代から全国に語り継がれ、独自の形で継承されてきた神楽。笛や太鼓の音とさまざまな神々がおりなす舞の裏側には、伝承のための物語があった。

舞

語り継がれる
11の祈り

神饌物

神楽舞の前に神々へ酒食を供える儀式。一般的には稲・米・酒・魚・野菜などが供えられる



1 国定め

最初の礼拝の舞。神楽殿の四方八方を清めることから「舞台浄め」などともいう



2 猿田彦の舞

天狗面のサルタヒコノカミが長刀を研ぎ澄ましながらか快に舞う。俗に露払いという



3 二神の舞

天地を合して万物を生ずることを象徴するアマツカミとクニツカミの二神による舞



6 五行の舞

春夏秋冬の神々と1人の姫による色鮮やかな鈴の舞。木・火・土・金・水の五神である場合が多い



7 磐戸の舞

八百万の神々が「天の安河の原」に集まり、天の磐戸を開く見せ場。笛や太鼓の音に合わせて、個性豊かな神々がにぎやかに騒ぎ立てる



8 恵比寿舞

磐戸開きによって世の中が明るく平和になり、恵比寿様がヒョットコとともにタイ釣りをする



9 大黒舞

豊年万作・家内安全・四海安泰を祈りつつ、ヒョットコの奉仕を受けながら大黒様が舞う



10 農業の舞

2人のヒョットコが、開発した荒地にまかれた種を食い荒らす白狐を捕らえようとする



11 八俣の蛇

クシナダヒメを襲うヤマタノオロチ。そこにササノオノミコトが現れ、退治する



4 八幡舞

アマテラスオオミカミが磐戸の中に隠れてしまったことから世の中は闇となり、青鬼が横行する。その鬼をイザナギノミコトが退治する

【木綿畑新田の太々神楽】

大正4年(1915)に大正天皇の即位を記念して故熊久保常吉氏の発起により、矢板市の木幡神社に伝わる神楽の伝授を受けて始められた。当初、12舞を受けたが、現在の演目は「湯立の舞」を略して11舞となっている。稲荷神社の春の例祭日である旧暦の2月初午の日に奉納されていたが、現在は毎年4月の第1日曜日に奉納されている。市指定無形民俗文化財。

【神楽とは】

神の座を設けて神々を勧請し、その前で踊る舞踊のこと。平安時代に様式が完成したとされる。神が宿る場所を意味する神座(かむくら)の約音が「かぐら」と呼ばれる起源との説もある。

《伝承元である矢板市の木幡神社》



↑木幡神社の太々神楽(矢板市提供)

市内唯一の神楽芸能
木綿畑新田地区は38戸の集落。そこには100年以上伝承されてきた市指定無形民俗文化財の太々神楽がある。全11舞ある神楽で、その全てを奉納するためには約3時間を要し、多くの人手が必要となる。そこで、地区の人口が減少傾向にある中でも継承していくために、最近では、担い手の確保と舞の伝承に加え、舞の数を縮小することで対応している。

神楽は平安時代に宮廷神楽(御神楽)ともいって始まったと言われ、民間で行うものは「里神楽」「岩戸神楽」などと呼ばれた。栃木県内に伝承された神楽は、古事記や日本書紀などの神話をもとにした太々神楽が多く、市内の神楽は木綿畑新田のものが唯一。年々、舞台で演じることのできる演者の数は減っているが、これまでの伝統を守ろうと、地域住民の手によって続けられている。